大賀茂川水系河川整備基本方針論点整理表（水系の特徴）

河川及び流域の現状

河川及び流域の概要

- 大賀茂川は、下田市に位置する流域面積9.99km2、流路延長4.55kmの二級河川である。
- 大賀茂川流域の気候は、全国的にみても気温が高く、降水量が多い海洋性気候である。
- 大賀茂川流域近傍の石廊崎気象観測所における過去10年間（平成15年～平成24年）の年平均降水量は1,785mmで全国平均の1,610mmを上回る。
- 大賀茂川は、上流の山地区間で1/150程度と比較的急勾配で、河口近くの市街地区間で急激に勾配が緩くなり1/1600程度となっている。
- 大賀茂川流域の位置する下田市は古くから観光地として有名である。
- 大賀茂川流域の土地利用は、平成21年度の市街地面積は昭和51年と比較して3倍になるなど流域内の開発が進んでいる。また、下流部は国道が川に並行し、上流部は県道に並行しており、その区間において市街地化している。特に上流部においては近年、宅地化が進んでいる。
- 下田市の大賀茂流域（上流の大賀茂地区と下流の吉佐美地区）の人口は平成18年の約3,900人をピークに減少に転じ、平成26年では約3,700人となっている。一方で、世帯数は平成18年以降も増加し続けており、平成26年の総世帯数は1,644世帯となっている。一世帯の平均人員は昭和53年の約3.4人から平成26年の約2.2人と大幅に減少している。
- 下田市総合計画ではまた、「景観や生態系に配慮した安全な水辺空間の整備」を基本目標として掲げている。その施策として、浸水の多い地区での雨水対策、未改修河川の治水対策、景観に配慮した水辺空間の保全、緑地や遊歩道の整備、河川を身近に感じる水辺空間の整備などを計画している。

治水事業の沿革と現状

- 大賀茂川流域では、過去数回にわたって豪雨災害や台風災害が発生しており、近年でも平成10年や平成15年に洪水被害を受けている。
- 大賀茂川水系では、昭和51年7月の豪雨被害により「小規模河川改修事業」の対象となり河口から約1.3kmの区間の河川改修が行われている。その後も河口部の導流堤工、3.0k付近の改修が行われている。
- 静岡県第4次地震被害想定で大賀茂川では、施設計画上の津波は河川堤防を越えて約2.0km遡上するとともに、最大クラスの津波では河川及び海岸堤防を越流し、沿岸部で約70haの浸水が想定されている。

河川の利用及び住民との関わり

- 大賀茂川水系では3件の慣行水利権による農業用水の利用がある。
- 大賀茂川河口には砂浜が広がっており、河口が海水浴シーズンに多くの観光客でにぎわうことが挙げられる。9月初旬には「ビッグシャワー」と称したイベントが行われ、「9月も泳げる下田の海！」をテーマにサーフィンスクールやビーチヨガ、ノルディックウォーキングをはじめ、浜辺の露天市や花火大会など観客が参加できるイベントが開催されている。
- 大賀茂川河口には川の両岸をめぐる1周約730mのボードウォークがあり、7月～8月には「はまぼう」の黄色い花に包まれる。
- 静岡県では、地域全体で身近な環境保護への関心を高めることを目的とし、リバーフレンドシップ制度を推進しており、大賀茂川においてもリバーフレンドシップとして河川清掃や除草等の活動が行われている。

河川の環境

- 大賀茂川流域においては、環境基準点が設定されておらず類型指定も行われていない。近年の水質調査結果からB類型程度であり、大賀茂川の水質は概ね良好であるが、隣接する稲生沢川の水質と比べると改善の余地がある。
- 大賀茂川流域では公共下水道による整備は行われていなく、下田市合併処理浄化槽設置整備事業により汚水処理対策が進められている。平成21年度時点での下田市の合併処理浄化槽設置替整備率は10.5%となっている。
- 下流区間は感潮区間を有するため、ボラやスミウキゴリ、マハゼなどの汽水・海水魚が多く確認されている。また、静岡県版レッドリストにおいて絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されているメダカや、要注目種（N－Ⅲ）に指定されているユゴイの生息が確認されている。
- 上流区間で確認される魚類は少なく、カワムツやアブラハヤ、シマヨシノボリなどである。
- 河川を縦断的に移動する種としてユゴイやヌマチチブなどの回遊魚が確認されている。
- 大賀茂地区(3.0K)～梅ノ木田橋では、河道内にヨシ類が繁茂し、ヨシ類群落を形成されている。
- 河口部～浜条橋にはハマボウ群落が市指定天然記念物として管理されている。
- ヒアリングでは、特定外来種であるナガエツルノゲイトウの侵入が指摘されている。

水系の特徴（着眼点）

近年は内水被害はあるものの、出水による大きな被害は発生していない。

下流部は、一定計画に基づく改修が進められているものの流下能力は低く、市街化や主要交通インフラである国道を抱え、氾濫により大きな被害の発生が懸念される。

上流部は近年県道沿いに宅地が広がり、氾濫による水害ポテンシャルが以前よりも高くなっている。

第4次地震被害想定に基づく地震・津波対策については、海岸管理者など関係機関と連携し、地域住民との合意形成を図りながら、必要な対策を検討していく必要がある。

観光地であることから、災害が発生した時には住民とともに、観光客の安全確保にも配慮していく必要がある。

河口部はボードウォークが整備されるなど地域と河川の良好な関係があるが、その上流の市街地を流下する区間は水辺へのアクセスが良いとは言えず、今後整備する際には水辺へのアクセスに配慮する。

リバーフレンドシップ制度を活用した河川美化活動など、流域全体で地域密着型の取り組みが行われている。

環境基準の類型指定はされていないが、下田市の水質調査の結果では、概ねB類型を満足している。しかし、近隣の河川に比べて数値は高く、改善の余地はある。

下水道整備事業は行われてなく、合併処理浄化槽設置整備事業により汚水対策が進められているが、普及率は1割程度である。

希少種であるカマキリやユゴイ、市指定天然記念物であるハマボウ群落など多様な動植物が生息・生育しており、これら生物の多様性を確保するための環境を保全・創出していく必要がある。

河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

- 河川整備の基本理念（案）
- 河川整備の基本方針（案）